

## 教養によって導かれる国際性

城西大学薬学部薬科学科 2年

植田 瑞美

私は、15歳から23歳の感受性豊かな時期を異国の地、アメリカで過ごした。全人口の95%以上が同一民族で構成されている日本出身の私にとって、出身国、母語、人種、宗教などのバックグラウンドが大きく異なる人々が1つの社会に集い、共存していることが不思議でたまにならなく、かつ大変魅力的であった。また、そのような環境に身を置けることが嬉しく、刺激を大いに受けた。日本に帰国してからもその思いは変わらず、海外で活動するにはどうすればよいのか、と世界で活躍する人物について書かれた本を読みあさったこともあった。そのような時に、日本を代表する国際人として緒方貞子氏についての本が多く出版されていたことを覚えている。東京都港区に生まれ、幼少期をアメリカと中国で過ごし、父と祖父は外交官、名付け親である曾祖父に至っては内閣総務大臣を務めた犬養毅氏という名家の出身ということだけでも好奇心が湧いた。さらに、自身は、国際機関の総本山である国際連合（国連）で難民高等弁務官事務所（UNHCR）の長官を10年にも渡って務められたことを知り、緒方氏の半生について一層興味が湧いた。恵まれた環境に甘えることなく、自分で何が必要かを悟り、それを培いそして駆使して活躍されている過程を手本にしたいと思ったからだ。しかし、当時、彼女の名前が記されている本は、難民関連や国際社会での調和性などについて綴られているものが主で、本書のように彼女自身について書かれた本を見つけることはできなかった。本読書感想文コンテストに応募するにあたり、本書、「緒方貞子—戦争が終わらないこの世界で」から緒方氏の強さ、また、その源である教養の深さを学んだ。さらに、これらが、彼女が世界で活躍する原動力になっていることに気づくことができた。本書を通じて、緒方貞子という人の生き方を参考に真の国際性へのヒントを学べたことを幸運に思う。

緒方氏を表わす言葉として、頻繁に「思いやりの深さ」、「問題の本質を理解する能力」、そして「人の意見をよく聞く」が上げられる。彼女が務めた難民高等弁務官は、難民の保護と難民問題への解決を適切に、且つ迅速に行われることが求められる。しかし、この任務は、一筋縄にはいかない。難民の保護ということに加え「国際的な規範と国家間の利益」が交差しあい、大規模で極めて複雑な問題へと発展するからだ。そこで、彼女の柔軟性と問題の本質を理解する能力が発揮される。彼女は、難民問題解決に向けて、まず、現場の人々と触れ合い彼らを知ろうとする。彼らが何を悩み、何を求めているのか、現場にどういうことがあるのかを見極めるのだ。「悩み」や「要求」は、人間の感情から

生まれるものであるから、いくら巧みな表現法を用いても書類からはその緊急性や重要度は読み取れない。むしろ現場で体感しないと測り取れないということだ。しかし、情だけでは混乱を招くだけで問題解決には至らないので、複雑多岐な問題点を統括し、解決へと導くことが重要であると説いている。この手法は、正に教養の本質の表れだと思う。教養とは、人の痛みがわかることである。人の痛みがわかるということは、人を知ることである。人を知り、痛みを想像することによって共感性が生まれ、問題解決へ向けて全力が注がれる。人の違いを自分のものさしで測り、それを単に拒絶するだけでは負のエネルギーしか生まれない。一方、違いに違和感を覚えたとしても、少しのエネルギーを費やしながらかそれを理解、尊重することによって柔軟性が養われ、互いにとって良い結果へとつながる。さらに、教養は、教育によって培った知識を基に合理的に物事を考え、問題点を解決する能力を養う。それ故に、緒方氏は教育を尊び、それが「身に付いた経験や知識を全て剥ぎ落としたとき、最後に残るもの」と説いている。

緒方氏は、教養が豊かであるからこそ、人の痛みに寄り添い向き合おうと耳を傾け、そこに生じた問題を迅速に解決することができるのだと思う。その結果、彼女は、1991年にイラクで勃発したクルド人難民問題を始め、着任以来様々な難民問題を解決し、その実績が高く評価され3期にも渡る難民高等弁務官の任務を全うされた。

緒方氏は、国際人となることを意識しながら自身の教養を深めたのではない。一人の人間として自分の道を突き進めた結果、豊かな教養を身に付け、自信を培い、そして、世界で活躍するようになられたのだ。本書を通じて、教育と教養の大切さ、そしてそこから生まれる自信と柔軟性の効果を学んだ。さらに、その武器を用いて国際社会で大いに奮闘できることに気づいた。私も勉学や人との交流を交えて、深く柔軟な人間性を形成し、自分の活躍できる場を広げていきたい。